

海軍力 ——万物流転——

リチャード・コッポルト

『昔はビールの泡
今はコーヒーの泡
そして全ては変わる』

1950年代の、まさしく英国的なミュージカルで歌われるこの意味ありげな詩の一節から拝借した本稿の題名はたわいないものであるが、中身はそうではない。わたしが伝えたいのは、軍事現象の1つである海軍力が、おそらく、元には戻れなくなるまでに変化を遂げてしまったということである。これは、ずっと前から散見された多くの要因が、20世紀の後半になってまとまりを見せ、これに、コンピュータ、情報システム等ハードの装備に焦点が当てられるようになったためである。我々が関わりを持たずにはいられないものの、必ずしも、我々と主義主張を共にしない大陸とあまり隔てられていない島国、その島国でも中級国家の海軍において、勤務してきた者としての考えを述べてみる。本稿に述べることの多くは、全ての国ではないにしろ、わたしの国より小さい国、そしてもちろん大きい国にも当てはまると考える。念のため、私は歴史の専門家ではない。

1960年代までの海軍力は実質的で、支配的かつ決定的であった。海軍力の歴史は、歴史そのものと同じくらい古く、同様に、海軍力の先史時代は、先史時代そのものと同じ暗い時代の筋書きを持つ。海を越え、人の住まない地へと向かうヒトの広がり、海を利用する力と知恵を持った者により達成された。その例として、特に注目されるのがオーストラレーシア、インド洋、およびアジア太平洋の各地域である。植民地社会は、海の利用により維持されるか、さもなければ隔絶され、そのまま時が過ぎ、後に、より強力な利用者により併合されるかのいずれかであった。

海軍力は制海力が基本であるのは、昔も今も同じである。制海は、海の利用に海上拒否を併せたものである。海を制すれば、海を利用できるし、同時に、他による海の利用を拒めるが、海の利用と海上拒否は、全くの左右対称でもなければ、絶対的な理念でもない。これらは不完全であり、時代的、機能的、および地理的に変化すると言える。しかし、海そのものは中立である。英国の喜劇役者アラン・ベネット（Alan Bennet）が言うように、『海では方角が全く分からない。陸地が見えるところ以外は。陸地には方角があるが海にはない。』しかし、たとえそうであっても、海とその下の海底には、魚やイル

カ・クジラといった生き物が棲み、金、マンガン、石油等の鉱物資源が眠っている。このような資源の利用や開発は、主として、近隣諸国の間に紛争を生じやすく、管理が必要となる。かかる管理は、取り決めや民事的手段で行えるが、最後の手段として、あるいは、始めから先制手段として、武力、すなわち海軍力が行使される可能性もある。こうした注目すべき例として、西太平洋や南シナ海が挙げられる。海は、東洋からの香辛料、南米からの財宝、あるいはずっと最近では、冷戦がさらに激しくなっていれば大西洋補給・援助ルートを通じ、米国からヨーロッパに運ばれたであろう『軍資金』¹等、民間、軍事両目的での物資・人員輸送に利用することができる。またこのような利用を、敵に対して拒否することもできる。フランス革命やナポレオン戦争では、英国海軍のフランス港湾封鎖により、フランスへの補給が遮断され、『大陸軍が全く考えてもみなかったはるか沖合の風雨に晒された船団が、その世界支配の前途に立ちだかった』（1892年、かの有名な米国の海軍大将アルフレッド・セイヤー・マハン(Alfred Thayer Mahan)が語った言葉)のである。ナポレオン軍への補給遮断を行った同じ海軍は、海を利用し、アーサー・ウェルズリー(Arthur Wellesly)元帥(後のウェリントン公爵、英国陸海空軍研究所の初代所長でもある)を半島戦争のためにポルトガル沖に派遣し、後のウォーターロー会戦への道を確保した。

海では、戦場の霧と司令官の思惑の中で、戦闘様相がはっきりしなくなる。栄光の6月1日戦争(1794年)で、英国は、フランスに向かう米国補給護送船団を迎え討ち、戦術レベルでの勝利を収め、より多くの敵艦を沈めたものの、戦略的には、穀物輸送船を取り逃がしたことから、敗北を喫している。そのより明確な例として、1915年、ユトランドで英国艦隊が手痛い打撃を被ったのに対し、ドイツ大海艦隊はウィルヘルムスハイブン港に逃げ帰り、戦争へは、二度と艦隊規模での参加は行わなかったという事実がある。英国艦隊司令長官ジェリコー(Jellicoe)提督は、この戦い、すなわち第一次世界大戦で敗れていたかもしれず、もしそうなら、まさにその敗北は一日にして喫していたはずだと言われている。このように、海の勝利は、例えば、ナポレオン戦争でのトラファルガー、日露戦争での対馬²、それにミッドウェー、珊瑚海、レイテ湾等における第二次世界大戦での太平洋大海戦など、海だけに留まらず、平行する地上戦をも決定的なもの

¹ キケロが初めて『神経戦』(フィリップ王攻撃演説第5集第5章)なる語句を用いた際、さらに、『ベキュニウム・インフィニション』すなわち『制限なき出費』とも言った。軍事兵站業務は、その重要性同様、依然、そのコストが極めて高額である。

² トラファルガー海戦と対馬海戦は、実に多くの類似点を共有している。100年の差はあるものの、これら日本と英国の提督は、戦術的勇気という点で同じである。戦う前に行った演説にも似た点がある。ネルソンの『英国は、一人一人がその任務を尽くすことを期待する』は、東郷の『皇国の興廃この一戦に在り、各員一層奮励努力せよ』と実質的に同じである。この2人の提督が指揮、部下への態度、あるいは戦い方について、共通の姿勢を持っていたのは興味深い。(『日露戦争記』第3巻、金港堂、1904年)

にできた。全て、未来永劫の大きな戦略的重要性を持つ勝利であった。

海上支配は、海からの戦力投入を可能としてきた。かかる戦力は、かつて、陸軍であったし、おそらく、今も、基本的にそうであろう。海軍士官が、今なお、陸軍の同僚を皮肉らんがごとく口にするように『陸軍は海軍から放たれる飛び道具』なのだ。ジュリアス・シーザーは、西暦紀元前 55 年から 54 年にかけて、英仏海峡の 22 マイルを制覇して、そこから、陸軍投入を行ったが、ヒットラーはそれをせず、またできなかったため、浅はかなモスクワ進攻を決意した³。ヒットラーは、確かに、典型的な大陸型『陸上動物』の異名をとり、その制海装備は乏しかった。彼が、大西洋での長期に及ぶ苛酷な戦いにおいて、英国、次いで西欧による補給・援助のための海上利用を拒もうとする努力は失敗した。さらに、ロンメルがエルアラメインで敗北に追い詰められた大きな原因は、枢軸国が、主に英国の空軍や海軍のために、その部隊に燃料、弾薬等必需品を補給するための海上使用を行えなかったことにある。米国の海兵隊や海軍が上陸作戦部隊を有し、英国が小規模な上陸能力を維持しているのは、海上利用能力が今なお有用であるという十分な証拠である。海上に展開し、はるかに多い敵の軍勢を脅かせる上陸部隊の能力は、第二次世界大戦で、また、湾岸戦争でも、何度となく実証されている。威圧と抑止をうまくミックスさせた砲艦外交は、大英帝国の維持に大いに役立ったし、小型砲艦で少数の陸上部隊を沿岸や河川の上流に配置する一方、巡洋艦戦隊を水平線の彼方に見え隠れさせながら、抵抗の長期化や戦況の激化を確実に防いだ。今日、人は殆ど飛行機で移動するが、支援・補給用の軍隊は、依然、海上輸送されている（湾岸戦争では、軍需品の 95% が船で到着している）。今考えるに、イラクが、小型で有能な、多分、水中推進型の通常潜水艦を数隻もち、ホルムズ海峡を封鎖し、米国やその同盟国と海峡支配を競い、サウジアラビア港湾の利用を拒んでいれば、戦況は変わっていたのではないと思われる⁴。そして、イラクは対応の難しい巧妙な機雷を有しており、敷設の仕方はあまりうまくなかったが、それは、弱小国家が格段に強力な敵に遭遇した際に用いる古典的な兵器であった。

海は、そこから陸地を砲撃する場である。沿岸防衛施設に対する砲撃は、何世紀もの間、着弾範囲が限られ、効果がないことも多かった。今は、（1,000 マイルを超える）長

³ ヒットラーの経験は、英仏海峡のことを『それは堀であり、そうする勇気のある者しか渡れない』と言ったナポレオンの経験と一部似通っている。ナポレオンにもそれだけの勇気がなく、モスクワに進軍して悲惨な目に遭った。

⁴ ホルムズ海峡の進入路に通常潜水艦を静かに敵対させる威嚇プレゼンスは、少なくとも、補給、増援作戦の計画と実行をともに複雑にするであろう。ひどい場合は、その大きな障害となり得る。これに対処するのは、最も洗練された装備やセンサーをもってしても困難であろう。対潜作戦（ASW）の条件は、背景ノイズが高レベルであり、偽装目標が多く、水温、水圧、塩分濃度等に顕著な差があるため、不利となることも多い。

距離攻撃が可能であり、(艦船・潜水艦発射ミサイル⁵、空母搭載作戦機、沿岸部隊への近接航空支援、銃撃等)様々な性格の攻撃が行える。すなわち、海軍戦力は集中的に、国際水域で移動もしくは展開しながら、格段に広い地域を脅かし、戦争地域に再展開したり地域戦を戦いながら、いざという時の急速な対応に備えることができる。戦略的抑止力としての潜水艦発射弾道ミサイルは、究極の手段としての攻撃であり、英国の場合、大西洋の活動域から地球上にある陸地の殆ど全域が狙える。そして、これよりかなり広い活動域を有する米国のSSBNの場合は、遥か南の洋上に浮かぶ島さえ、狙おうと思えば狙える。旧ソ連の崩壊以降、北大西洋以外でも、欧米海軍の海上交通路では、大きな挑発行為は起きていず、それ以前も、数年間、脅かされるということはなかった。海上拒否は、例えば、スエズ運河、紅海、あるいはマラッカ海峡といった狭い航路でなら危険を生じるものの、『大海原』(外洋)でなら大きな脅威ではない。

しかし、沿岸水域つまり『褐色海』では、陸地からのミサイル、地上拠点航空機、沿岸潜水艦、機雷等による抵抗が予想される。これは新しい現象ではない。ノルウェー海に進入しようとするNATO海軍が、ソ連のミサイルを積んだ沿岸基地発進の長距離航空機、海上作戦機群、それに潜水艦による挑戦を受けそうになったこともあるが、これらは全て、指揮システムに連動したセンサーらしきものから得た情報により、進入艦船がソ連海軍の北極要塞に近づくにつれ抵抗の度合いを深める徴候を示していた。ソ連軍は、ある意味で、NATO軍にソ連の北部基地を叩くための海上利用を拒み、NATO軍の北極海利用を拒否しようとしたのである。その同じソ連潜水艦隊は、また、NATOに北極海の援助・補給ルート利用を拒否しようとした。NATOは、代わりに、グリーンランド、アイスランド、および英国に囲まれた地域の隙間を海軍戦力で埋め、ソ連潜水艦がノルウェー海から抜け出る海域を封鎖または拒否しようと試みた。それより数年前、中距離のミサイル発射能力をもつソ連海軍の潜水艦隊が、米国東部沿岸の沖に、西部大西洋ミサイル哨戒区域を設定していた。

以上は過去のことであるが、ある程度までは、現在の状況でもある。しかし、これからは違うし、それゆえ使う言葉も変化している。どう変わったか、またどの程度変わったかは、現在、英国で海軍活動を説明するのに用いられている『統合活動への海上貢献』なる語句からうかがい知ることができる。全く変わってしまったわけではないが、大きな変化である。海軍は、最早、海上や海中で独立しているのではなく、統合戦闘空間で、他の軍と協力する存在になっている。これとて、新しいことではない。偉大な米国の航空士官アーノルド(Arnold)将軍は、1946年、『この戦争(第二次世界大戦)が教えてく

⁵ 英国海軍は、トマホーク対地攻撃ミサイル(TLAM)の取得により、新たに、紛争発生時の威嚇が行えるようになる。英国は潜水艦発射TLAMをコソボ、アフガニスタン両地で初めて使用した。海軍の任務と戦力は、依然、その拡大と更新が可能である。

れた大事なことは、陸海空 3 軍の活動が、統合計画や統一部隊と、どの程度調和の取れたものとなり得るか、また、ならなければならないかということである』と語ったが、このような感慨を漏らしたのは、おそらく彼が初めてではなかったであろうし、彼が最後でなかったのも確かである。また、米国は別としても、このような一国の統合部隊が（小さな局地戦を除き）一方的に動けるわけではなく、何らかの連合形態において、他国の部隊と合同で活動することになる⁶。一旦陸に上がれば、最早、陸軍戦力との区別はなくなるが、現在では、さらに、何百マイルにも及ぶ複雑な協力活動が、これに取って替わっている。それに、首都、工業地帯、人口密集地といった目標は、そのほとんど全てが、海岸線付近から 1,500 マイル以内に位置している。ということは、陸軍戦力に煩わされていた沿岸域の海上活動が、何百マイルも沖合に出て行えることになる。すなわち、『沿岸域』といっても、海岸に近いということではなくなっている。空軍は、陸上と海上のいずれをも拠点とすることができ、陸と海にまたがる活動を容易に行える。陸と海は、それぞれの制限や特異性を有しているものの、力強い共通点もある。これ以外にも、特に、宇宙の存在があり、海上部隊によるその利用は、通信、精密航法、および情報収集の必須条件であるとともに、兵器や警戒網の拠点設置、すなわち指揮統制に必要な場となっている。宇宙は、時に情報戦とも呼ばれる情報ネットワーク中心の海上戦に向けた、また、全ての部隊が現在の状況を正確かつリアルタイムに把握できるよう、簡単そうであっても、達成困難な『情報獲得』手段の提供に向けた利用がなされなければならない。

宇宙は新しい海であり、本来、宇宙は、それ自体、かつての海より中立的である。しかし、宇宙の軍事目的利用はそれほど新しいことではない。筆者は、1980 年代、海上任務部隊隊司令官として、ソ連の宇宙利用による利益を拒否しようと、SOSS——ソ連海上監視システム——による情報傍受を回避する仕事に忙殺されていたことがある。宇宙は卓越したグローバリゼーション環境である。宇宙はサイバースペースを可能にする。そして戦争の性格を根本的に変えているのは、コンピュータの使用であり、情報技術の発展であり、飛躍的に増す C4ISTAR（指揮統制・通信・コンピュータ・情報・監視・目標捕捉・偵察）の重要性である。C4ISTARは、その支配が徐々に通常戦力の任務領域を越えたものになっていくであろう。敵が、事実上、対応能力を全くもたないという絶対的支配が潜在的に存在する。これは、主に、ある事件への対応行動が後続の事件に否定さ

⁶ 中規模戦力による一国の作戦は、なおも、例外的に起こり得る。1982 年のフォークランド諸島奪還を目指した遠征は、つい最近のことで、米国、チリ等の第三国から多少の支援を得てはいるものの、その好例である。国連軍の支援を受けたが、独自に行ったより最近のシエラレオネ戦争は、恐らく、より適切な例であろう。一部、こうした戦争の必要性が残っているため、特殊戦力よりバランスのとれた戦力が今でも維持されているのである。未来における連合軍の性格は、確信の持てる予測が全く不可能であり、したがって、必要とされる貢献の性格も全く分からない。

れる前に、最初の事件への対応ができなくなるからである。この概念も、目新しいものではなく、敵より素早い対応を維持しようとして、混乱、さらには、取り返しのつかない事態に陥るというのは、多くの国の指揮官が認識するところである。しかし、まさに、進歩に逆らう例外的な状況として、何らかの決断、それも確実性の低い、ときにはより困難な決断を、今後も、当分、人間自身が不十分な情報に基づいて、しかも時間に迫られて行わなければならないであろう。そして、どのような決断がなされるかの予想や、それに対応する訓練は、シュミレーション装置の驚異をもってしても、さらに困難となろう。

以上のことから二つの結果が生じる。一つは、一つの戦争手段として、何千年も前から存在してきた非対称戦が、新しい要素として台頭してきたことである。例えば、ストラボがその著書『地理』で述べているごとく、ポントスのミトリダテス王は、西暦紀元前 67 年、ローマ軍のプトレマイオス將軍率いる圧倒的多数の軍隊に遭遇した。しかし、王は、自分の住んでいるトラブゾン近郊の黒海沿岸に、ツツジや月桂樹の果汁毒を含んだ糖蜜があることを思い出した。プトレマイオス將軍の兵士たちは、急性中毒症状と幻覚を誘発するこのトラブゾン糖蜜の宴に招待された。彼らは酔っぱらい、痙攣と麻痺を起こして崩れるように倒れると、そこへ、待ち構えていたミトリダテス王の軍隊が襲い掛かり、彼らを一人残らず殺してしまった⁷。非対称戦は、これまでになく不釣り合いな効果をもつ西欧支配に対処する、おそらく、最後の手段となる限りにおいて、また、地球規模化した情報システムや輸送という別の支配手段により、非対称戦に挑戦する側の活動が可能になるという理由で新しい。そしてこの状況は、はっきり言って、続きそうである。ムーアの法則によれば、コンピューターの性能は、21 カ月毎に倍増するが、これは、ここ 40 年余りそうであり、少なくとも、あと 20 年は確かに続く。海軍力が、活動組織としての分離性を保てなくなったのは、ムーアの法則が現れたところからではなかったか。別の法則によれば、計算能力の単位コストはだんだんゼロに近づくという。情報技術の刷新は、民間によるものが多いと予想されることからだけでも、どんどん有能化する情報システムが、国家の壁を越えて多くの人に利用されるようになる。非対称戦の抑止、防衛、および後始末、さらには、非対称戦を行う国やその支援国への威嚇・制止といった活動から、海軍部隊とその隊員に課される一連の新しい役割や任務が開拓されてきた。これらの新しい任務や能力には、現在の遠征戦略に改良を加えたものもあるだろう。抑止には、侵略者の能力をよく知るとともに、対抗策の限度や範囲を侵略者に分らないようにしておくことが含まれると言ってよい。新しい戦力の一つは、ミサイル

⁷ この場合を含め、非対称戦は派手であるが、最終的にはうまく行かない。残りのプトレマイオス軍は戻り、数週間後復讐を果たした。問題は、現在、未来にかかわらず、非対称戦により、それを行うものが欲するような長期的成果が得られるようになるかどうかである。

防衛システム用としての洋上拠点施設であり、もう一つは、海から隠密に投入できる特殊戦力がある。英国のジェフ・フーン（Geoff Hoon）国防相は、12月5日ロンドンで、9月11日の事件とは別に、『やはり、危機は、来る前にこちらから向かって行く必要がある』と述懐している。したがって、彼は、英国の改良統合・国家戦略が、向こう15年間、引き続き、新型空母2隻とそれに対応する航空機の取得を中心に展開されると予測する。したがって、英国海軍の活動概念は、機動戦略型取り組みとの提携が図られ、空母、原子力潜水艦、上陸作戦部隊のような中核的装備に対抗する中核能力——すなわち沿岸機動力、海上打撃、好適アクセス、およびC4ISTAR⁸——の取得・維持とも言えるものになる。これに加え、私は、海上テロと戦う新しい任務が待ち受けていると考えるが、さらに、公海における海賊行為という古いが多様化する犯罪をこれに含めたい。新しい任務の核を成すのは、情報、安全、および沿岸海域の警備となるのではないか。航行制限を課す活動が多くなると予想されるが、モーリシャスやジブチを経由するロンドン行きの貨物船を『停船させて搜索する』最近の活動は、その前触れである。沿岸海域の確実な制圧だけで十分なはずはない。沿岸、沖合、島嶼海域、それに港湾の建物や施設は、特に、攻撃を受けやすく、そのための取り組みや新たな資源が必要となりそう。こうしたことは、言い方は拙いが、『非対称戦対応への海上貢献』、より適格には、『本国安全保障への海上貢献』という表現に集約できよう。これは、海上支配、海上利用、そして海上拒否が、今一度、見直されるべき時期の到来を告げている。さらに、悪意の非対称戦士が、おそらく、それ以外の者にさえ後れを取り、未だにアフガニスタン（などの）戦域から得た教訓が何であるかを知らないまま手を拱いているのには驚きの念を禁じ得ない。

二つ目の結果として、意思を決定するという人間の役割が残された。多くの軍事的任務、なかでも、特に緩慢な任務において、人間が果たす役割は、依然、非常に重要であり、特に、平和支援活動の場合、人間が『付加した価値』は、システムによる再生は行えない。英国の防衛ドクトリンは、広義の任務達成権限が、上官から信頼できる部下に委譲される『ミッション・コマンド』がその中心を成す。これは、言うまでもなく、ド

⁸ このような戦力を簡単に言うと、敵の決戦地点や要衝を威嚇あるいは攻撃すべく海上・上陸部隊を沿岸地域に投入する『沿岸機動戦略』である。統合作戦では、沿岸地域における敵の側面脆弱性確保に向けた地上作戦の実行・支援となる。『海上打撃』は、直接・間接照準射撃、戦術空軍力、および作戦ヘリコプターによる陸上戦力阻止能力を言う。『好適アクセス』とは、公海や沿岸海域での機動作戦により、戦域、海上支配、および統合戦力防御の開始を可能にすることである。最後の統合戦力防御は、沿岸機動戦略や海上打撃に必要とされる戦力——例えば空母——の特質から可能となるのみならず、射弾の散布・分布、信号管理、ならびに共同欺騙・機動戦略をかい潜り難くし、さらに、新型構成品や集団防御をそれ以上にかい潜り難くしても達成される。最後に、C4ISTARでは、我々の将来の装備が、統合作戦域の融合的で、正確且リアルタイムの状況情報配信とともに将来における統合作戦の指揮統制に貢献することになる。

イツ語の Auftragstaktik（戦術委譲）が語源である。したがって、人間そして人間の集まりを保障し、支持し、大事にし、必要に応じ、調整することが必要となる。海軍力を統合・連合作戦域で役立てる業務に就く者でも、その任務は、海上戦務や海軍任務につながっているというのが彼らの認識なのであろう。人間とその環境あるいは共に働く者——海の友——とのこのようなつながりはなおも存在し、海軍力は、これを行行使する者の特性という点において、依然、健在である。1941 年 5 月、カニンガム（Cunningham）海軍大將が、クレタ島からの英国軍撤退時に英国海軍が大きな被害を被った際に述べたごとく、「戦艦の建造には 3 年かかるが、伝統の再興には 300 年かかる。」ウィンストン・チャーチルは海軍の伝統を「ラム酒と男色と鞭打ち、それだけ」と馬鹿にするかもしれないが、海軍で働く人々の伝統こそ、新しい戦略、ドクトリン、シナリオ、そして技術への適応を可能にする唯一最大の要素である。なぜなら、陸海空 3 軍等を併せた軍隊は国家最大の資産の一つとなり得るし——あるいはその全てに誤れば——最大の負債を抱えることにもなるからである。徹底した訓練、育成、そして改善が不可欠となる。「偵察に要する時間」と同じく訓練や演習に費やすコストは、賢明な使い方であるかぎり、決して無駄遣いではない。艦船、大隊、あるいは戦隊のいずれを問わず、次に大事なのが戦場における忠誠心であり、戦うものは、軍人精神に生き、恐らくは、かかる精神のまま死を迎えることになる⁹。人間の教育や訓練に変化が生じ、そのための技術が変わり、人間の数が減り、また増えることがあったとしても、精神是不変であり得る¹⁰。それゆえ、精神こそが、統合・連合作戦の助けとなるものである。人間は一人一人違うが、みな大切である¹¹。

統合性には、協同組織所有以上の意味があることから、この人間一人一人の違いを一つの肯定的な要素にまとめる努力が必要となる。共通の人間管理により、実戦効果を損なわずに明確に得られる経済性は間違いなく存在する。同様に、個々の兵站業務をつなぎ合わせるのは、全体として、不効率にならざるを得ず、仮に、戦闘部隊——人間のいる——個々の支援が確保されれば、莫大な経済性が潜在的に得られる。能力の提供は、その必要性から拍車がかかるかもしれないものの、財務当局の制限が避けられないというのならば、節約した費用を能力の向上に当てるということもできる。戦う者は最良の

⁹ 英国軍にとって、『軍服』なる語は、服装全体、その色、かぶり物、がっしりしたベルト、髭面など、まさしく言葉の組み合わせである。しかし、その一種独特の衣装は、所属戦闘部隊の識別に役立ち、特に、その部隊への忠誠心を象徴する。

¹⁰ 1917 年の英国海軍、英国海兵隊、英国海軍管区、ならびに英国婦人海軍部隊を併せた数は、いちばん多いときで 457,000 名であった。1918 年の USN および USMC を併せた数は 455,000 名であった。現在、英国の海軍職員数は 45,000 名ほどである。このように、英国海軍職員数は顕著に縮小している。精神については、その後も変わっていないと考えられる。

¹¹ ナポレオンは、また、『戦争は、4 分の 3 が人間の特性と人間関係で決まり、人間と物資のバランスは残りの僅か 4 分の 1 を占めるに過ぎない』とも言っている。

戦力を望み、それを得る手段など問題にしない。例えば、英国海軍の 45 型駆逐艦は、ミサイルの専門家である陸軍准将率いる統合チームが、その調達を行いつつある。これは、二つのことを生じさせる。一つは、3 軍の別なき最良の艦船調達人事により、統合活動への海軍貢献が増すということであり、もう一つは、システム全体の能力を装備の取得に優先させるべきで、この場合、ミサイル戦力は 3 軍個々やその環境の制限を受けないということである。必要とされる能力が空や地上の装備から提供されるのがより望ましいのであれば、そうすべきである。3 軍間の対立は装備に関わるものであり、システムによるものではない。これは、取り除ける対立であり、部隊の忠誠心——海軍の場合、人間が勤務する就役中の装備に向けられる——とは別の問題である。以上を総合すると、必要な防衛力、さらに、海軍戦力、陸軍戦力、空軍戦力といった個々の戦力を監視できる統合防衛省のようなものが必要となろう。しかし、うれしい誤算とでも言おうか、海上システムが多くなり、それにより、取り込める資源が増すという十分な証拠が出てくれば、統合手法にうかがわれる効率性から、海軍力が単独で行うより大きな海上戦力、さらに、海からの戦力投入能力が得られることになろう。多くの国がこの道を進んでおり、これは、障害なき道である。

国による統合化の道が困難ならば、統合戦力を国際化する危険性ははるかに高く、これはビジョンだけで、前進がそれに追いつかないのが現状である。今一度、45 型駆逐艦の例を見てみよう。この国家プロジェクトは、1991 年、フランス、イタリア、英国 3 カ国のプロジェクトとして始められたが、挫折した。この 3 カ国プロジェクト自体は、1990 年代を念頭に入れた NATO フリゲート艦更新計画と呼ばれた 1980 年代の多国籍プロジェクトが失敗したのを引き継いだものである。45 型の就役予定は、結局、当初の 42 型駆逐艦戦力更新予定年度から約 9 年遅れの 2007 年となる。

このように、海軍力は、他の多くの物ごと同様以前のそれではなく、最早、この力の、あるいはこの力のみの保有により、国境の安全が保障され、国が維持され、帝国が成立するというものでは決してない。陸軍力や空軍力についても、同様のことが言えるが、そうでない場合もある。海軍力は、統合・連合作戦域での戦力使用を支援する柱の 1 つであり、軍事力に依存する安定に、今なお、重要な貢献をなしている。そしてそれは、以前同様、現在も、また、将来においても、国家・国際安全保障の鍵となる貢献力である。